

第3期 第8回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

27.2.9

はじめに、北村委員長から市長へ「平成 25/26 年度 第3期札幌文化芸術円卓会議からのメッセージ」を手渡した。

【北村委員長】

まずは、この2年間私達は、熱心に議論してきたので、このメッセージが少しでも札幌市の文化芸術に活かされるように祈っている。

さて、この円卓会議では、何か特定のことを指定されて答申するのではなく、前提を持たずに委員が札幌の文化芸術に対して忌憚なく意見をし、文字通りテーブルを囲み円卓で議論してきた。その中で、各委員が感じていたのは、文化芸術や創造都市さっぽろの市民であるといったことやその誇り、プライドをどのようにすれば市民に根付かしていくことができるのかということだった。

それを考えていく上で、報告書の最後に様々な事業が掲載された表があると思うが（資料1）、これは長期的なドリームプランから短期的にすぐに取り組みめるものまで、アイデアの宝庫だと思うので、機を見て実行に移していただきたいと考えている。

そして、こういった事業を通じて、アートを根付かせたいと思ったときに、どうしてもアートや創造性となると垣根が高くて、他人事のように思ってしまう市民が多いと考えた。そこで、アートや創造性について考えてみたところ、食生活や衣装などを感じ、考えることそのものがアートであり、美術館やコンサートホールに行かなければ、アートに接することができないという訳ではないという結論に達した。

また、創造性についても、特別な才能に恵まれた人だけが発揮できるというものではなく、みんなで意見を出し合う中で、新しい解決法や工夫を、トライアルアンドエラーを繰り返しながら見つけていく、小さな問題から世界的な課題まで、創造性なくして生活してはいけないという結論に達した。

そのような中で、札幌としてどのようなことを実現していけばよいのかと考えたときに、次の2点を提案として取りまとめさせていただくことになった。

1 点目は、札幌には様々なアートコンテンツがあり、国際芸術祭やジャズフェスティバル、雪まつりなどもそうですが、そういったものに対して、札幌がアートのまちであるということを、それから札幌からアートの情報が発信されているということを、「さっぽろアート」としてブランド化していくということができないだろうかということ。

もうひとつは、国際芸術祭もそうだったと思うが、必要な人に必要な情報が届かないということがあって、よく見るとインターネットや紙媒体などあるけれども、どうにかして必要な人に確実に情報を伝えることはできないのか、つまり、アート情報のインフラ整備を行う必要があるのではないかと。それを我々は、アートコンシエルジュと名付け、アートの情報を案内し、伝達して、ただ伝えるのではなく、解説し、相談を受けといった様々な仕事をするインフラ整備をしていくとした。

そのためには、事業や施設運営などが縦割りで行われ、情報をどこかが隠し持っている、それを出さないということではなく、今も行われているとは思いますが、連携など横断的な営みが行われていかなければならない。ただ単純に横で結ぶのではなく、一歩進んで、積極的に他の部署に入っていく、アートを浸透させる。例えば、私は 500m美術館の関係でいろいろやっているのですが、そこには文化部の問題だけではなく、交通局の問題やその他の部署の問題などが様々絡み合うことがある。そういったことがあった時に、それをアートにより越境していく、ただつながるのではなく、融合する。そこまで進める形で、これからの組織運営を行っていただきたい。このようなことを我々は考えたので、是非実現してほしい。

では、そういったことで、これから 2 年間一緒にやってきた仲間を紹介するので、各委員からも一言ずつ御発言いただきたい。

【南副委員長】

北村委員長の方から話のあったとおり、札幌市では様々な事業が行われているわけだが、個別に行われていると、外から来た観光客などには、音楽は音楽で何かやっているよ。美術は美術で何かやっているよとしか映らない。これを 1 本化して、毛利の三本の矢ではないが、これを全体として「さっぽろアート」としてはっきり見せる方が、対外的にアピールできるのではないか。そして、そのための情報の見せ方。いろいろやっているのも、もっと市民が享受できるように。そして、連携することで、こういうまちなんだと感ずることができることが大切なのではないか。アートがブランド化すれば、それ自体が、例えば産業として、付加価値を持つことができる。ということで、様々な部分でプラスになっていこうと考えている。

【石川委員】

まずは、円卓会議に参加することができて、大変有意義なものだったと考えている。そして、私個人の意見としては、委員長の方から話があったとおり、アートコンシエルジュ、これを一番推したいので、市民がアートについて何か知りたいときに、気軽に相談できる窓口が札幌市にあると、市民と行政の距離も縮まり、様々なアート情報が札幌市の方にも入ってくることになる。そうすると、例えばまた国際芸術祭などを行う際に、力になってくる。それに、対外的に観光客など外から来る人に対して、札幌がアートのまちだとアピールできる。については、アートコンシエルジュという一種のメディア、窓口を是非設置していただきたい。

【尾崎委員】

舞台芸術に携わっている者として、今回この会議に参加でき感謝している。コンシエルジュについては各委員から話があったとおり、最も時間を割いた部分であり、いろいろなことがこれにより解決していくと思う。芸術文化は、世界的に見れば、観光資源にもなりうるコンテンツだと思っている。こういったものを伝達、発信していく機関が必ず必要になると考える。是非検討いただきたい。あとは、芸術文化は、創造されているモノ、現場、作品、そういったものに触れることが一番と考えている。よって、文化行政に携わる方にも是非本物を見ていただきたい。それが、文化芸術の発展にも寄与すると思う。

【清水委員】

私は、大学生の時から札幌に住んでいるが、動物園や美術館、図書館の開館時間が利用しやすい時間に変更されるなど、市民が日常的に触れられる文化芸術のレベルが少しずつ高まってきていると考えている。札幌に住むことの魅力も高まっている。文化芸術に関する（市民が参加できる）会議があるのも斬新だと思うので、こういった施策は今後も続けて、文化芸術を振興していただきたい。

【鈴木委員】

私は小学生のころから、芸術の森のジャズスクールにお世話になるなど、まさに札幌の文化芸術育ててもらったという思いがある。そういった意味で、今回会議に参加できて光栄だったし、学生として、若い方が札幌の文化芸術にどのような思いを持っているのかということを考えながら、この会議に参加したところだが、10代や20代はファッションなどには関心がある時期だとは思いますが、札幌のアートについては認識が薄いのかなと感じた。そのため、今後この会議のメッセージを実践していくことで、将来の札幌のアートシーンは変わっていくと考えているので、是非活用いただきたい。

【富田委員】

私は、札幌を拠点としたアーティストであるが、先日の国際芸術祭でも、資料館の方で子どものワークショップを担当させていただいた。そのような経験もあって、今回この議論の場も非常に有意義に過ごすことができたと思う。そして、この会議ではいろいろなことが話し合われてきたが、グローバルな札幌というまちを目指すため、あえてひとつあげるとすれば、やはり未来の文化芸術を担う子どもたちに、どのような文化芸術を残していけるかということ。それを伝えるということは、大人が傍で支えると同時に、子どもとともに学ぶ、その過程で、この報告書にもある、「寛容性のレッスン」であるとか、多様性であるとかを身に付け、そうすることで進んでいくという、いいサイクル、循環が生まれればと思う。そういった意味で長期的なスパンで、軸を持って進んでいただければということをお伝えしたい。

【尹委員】

各委員がいろいろな意見を言ったので、私は今回会議に参加した感想として、文化芸術の意義として、文化芸術は、いろんな垣根を越えて交流できるものだと思っていて、創造都市さっぽろであるとか、国際都市として札幌が輝くために、文化芸術というさっぽろのアートがブランド化され、例えば雪まつりなどでいろんな交流が生まれ、さらに心が豊かになっていくことを望んでいる。文化芸術は、心を豊かにするというその効用から、目に見えた成果は期待できないのかもしれないが、これまで札幌市が長くアートに力を入れてくれたおかげで、市民がすぐ身近にアートを感じられるまちになってきていると思うので、それがもっと浸透していくように、続けていってもらえればと考えている。

【北村委員長】

もう一人、山田委員が会議に参加していたが、体調不良で欠席したため、山田委員のメッセージを代読させていただく。

「わがまち・札幌の文化芸術の未来の姿を、様々な立場の委員の皆様と円卓会議で十分に語り合え、一定の方向性を出せたことは、とても新鮮でより良いまちづくりを考えるきっかけとなるとともに、良い経験となりました。誰にとっても文化芸術が身近なものと感じられるようになることを願いつつ、これからも「夢」の実現に向けて、多くの方と語り合っていきたいと思います。このような機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。ありがとうございました。」

【市長】

それぞれのお話が共感できるものであった。2006年に「創造都市さっぽろ」を宣言し、創造都市とは？芸術とは？というところからスタートしたが、創造都市の魅力は、創意工夫、そして市民がそういうものに取り組むことを妨げない、あるいは、取り組むことができるプラットフォームをつくるというところ。そういうまちが、これからの持続可能な発展につながっていくという思いからこの宣言をしたもの。アートというよりはアイデアというか、もう少し身近なものをということで、“ideas city”とした。そして、これは、クリエイターやアーティストなど一部の人のものではなく、みんなが持っている、生活環境を豊かにしたいという思いを実現していくことが、最終的な目標になるということから、このような宣言に至った。

それが、国際芸術祭に至るまで、アートとは何だ？芸術とは何だ？と議論しながら、敷居の高いアートの方に流れてしまっはまずいだろうなと思い、国際芸術祭の広報の際にも、市民にどう浸透させるべきか、焦りにも似た思いで考え、できてきたのが「アートしてる」というフレーズ。少なくとも職員にはわかってもらいたいと、エレベーターに掲示するため、5種類のポスターを作成したが、趣味の自転車やお弁当をつくる母親、家庭菜園している夫婦などに対し、これがアートなんだと言い切るものになっていて、今思えば非常にいいものになったなと思っている。

そのような形で、生活をいかに豊かにしていくかというところに着目すれば、アートの垣根などはなくなって、市民が豊かさを求める意思を十分に表現できる、あるいは、つながりあうことを求めるまち、それが創造都市で、そういったものが産業などいろいろなものにも影響してくるはずだと考えた。

そして、ご報告いただいた「さっぽろブランド」という部分については、例えば、芸術とかアートという親しみにくいので、「豊かさのプラットフォーム」という形で、音楽も美術も文学もいろいろな芸術分野をまとめて情報提供するというか、コンシエルジュ的な解説も含めて、並べていく、問い合わせ先をつくることで、観光文化局でやるものも教育委員会でやるものも1本で打ち出していく形にならないかという風に思った。情報発信はいろいろなところでしているけれども、バラバラでは伝わらないというのはおっしゃるとおりで、札幌の行政全体として、市民が豊かさを追求するために、どんな機会を与えていくことができるのか、共有しようとしているのかということがわかるようなものをつくれば良いなど。

行政の情報発信というのは、最初に来るのは情報公開などのように、欲しいときに言われて初めて提供するもの。それを一歩進めて、知らなければいけないものをどう共有していけるかというものにしていかなければならないという思いがあり、コンシエルジュというものは、まさに案内人。こんなことやあんなこともあるので、どうぞ参加してくださいと、言える場をつくるのが本当に必要だと思った。

また、提言に資料として添付されている、様々な事業提案についても、大切だと思うし、平成30年に開設予定の（仮称）市民交流施設内に設置予定のアートセンターにおいても、こういったコーディネートをやる案内人をしっかりと設置して、このまちで行われているいろいろなことに対して横串を刺していけるという施設にして、そのようなディレクターを置くということが必要なんだという話だと思うので、そちらについても拝聴させていただく。

話は変わるが、雪まつりも実は進化していて、雪像をつくるというところから、光と音楽をミックスする、そして今年はオペレッタをやるということで、様々な条件や環境が変わっていく中で、工夫が生まれ、進化してきた。それがまさに、札幌の持続可能な発展を約束する、人々の知恵の象徴・端緒ではないかなと思っている。

お忙しい中お集まりいただいたわけだが、各委員から参加してよかったという声を聞いて安心した。本当に貴重なご意見をいただき、心から感謝している。報告書をおまとめいただき、ありがとうございました。